

大学生の就職活動における情報収集が 進路探索行動に及ぼす影響

樋口匡貴・塚脇涼太・蔵永 瞳¹・井邑智哉¹・深田博己

(2008年10月2日受理)

The Influence of Information-gathering upon Career Explorations
in Job-hunting Behavior by College Students

Masataka Higuchi, Ryota Tsukawaki, Hitomi Kuranaga,
Tomoya Imura and Hiromi Fukada

Abstract: The purpose of this study was to investigate the relationship between information-gathering in job-hunting behavior and career self-efficacy, and to clarify the influence of those upon career explorations. A questionnaire was completed by 218 female college students who had engaged in job-hunting. The results of structural equation modeling indicated that self-efficacy promoted the information-gathering behavior including various contents from various sources, further, information-gathering behavior promoted the career exploration. However, information-gathering from close people or including contents about self affected negatively on career self-efficacy. These results were discussed from the view of “good job-hunting” for undergraduate students.

Key words: job-hunting, information-gathering, career self-efficacy, career exploration

キーワード：就職活動, 情報収集, 進路に対する自己効力感, 進路探索行動

問 題

大学生の多くは、卒業後の主要な進路として就職を選択する(中島・無藤, 2007)。その際、多くの学生が様々な就職先の中から業種や職種を選択し、特定の企業に就職するための活動である、いわゆる“就職活動”を行うことになる。

大学生の就職活動においては一般に、自己の興味や関心、特徴/特長を探る「1. 自己分析」、様々な業種や職種についての情報をまとめる「2. 業界・職種研究」、自己分析および業界・職種研究に基づいて、興味関心のある具体的な企業についての情報を収集する「3. 企業研究」、特定の企業について就職希望の申し込みを行う「4. エントリー」、単一あるいは複

数の企業についての「5. 説明会への参加」、実際の選抜過程の1つである「6. 筆記試験」および「7. 面接」というステップを経て行われることが多い(リクルート, 2008)。この7つのステップの中には、たとえば自己分析のように結論を出すのが非常に困難に思えるものもあるが、単なる情報収集のように、インターネット等を通じて比較的手軽に行うことができるものもあるだろう。

いずれにせよ、大学生の多くはこれらのステップを経て、就職先を獲得することが必要となるが、この就職活動にとって重要な役割を担うのが、進路に対する自己効力感である(たとえば、Lent, Brown, & Hackett, 1994)。

進路に対する自己効力感とは、進路選択や適応の過程に必要な行動をうまく行えるという自信のことであり(Betz & Hackett, 1986)、進路選択の一連の過程

¹ 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期

に対して促進的な影響を及ぼすことが指摘されてきている。たとえば浦上（1996）は女子短期大学生を対象にした調査の結果、強い進路に対する自己効力感が積極的な就職活動を導いていることを明らかにしている。また安達（2001）は大学生を対象とした調査の結果、自己効力感は就業動機を媒介して進路探索意図を促進させ、加えて直接的に進路探索行動を促進させることを明らかにしている。

それでは、この進路に対する自己効力感は、どのようにして促進させることができるのだろうか。自己効力感は本来、Bandura（1986）によって提唱された概念であり、それがLent et al.（1994）によって進路関連領域に適用された。そのため、進路に対する自己効力感促進のための試みについても、Bandura（1986）が述べる自己効力感の4つの源泉が注目されてきた。Bandura（1986）によると、自らが達成を経験する「個人的達成」、他者の達成や成功のプロセスについて観察する「代理学習」、周囲からの肯定的なサポートや支援を受ける「社会的支持」、不安や抑うつなどの「情緒的覚醒」の4種類が、自己効力感の源泉となる。

進路に対する自己効力感促進のための試みとして、「代理学習」に注目し、男性中心である職業分野で成功した女性の例を集めたビデオを見せることによって女性の自己効力感を高めることに成功したのがFoss & Slaney（1986）である。Foss & Slaney（1986）は、80名の女子大学生を対象に、伝統的に男性中心である職業分野で成功した女性の例を集めたビデオを視聴させた。従来、男性中心である職業に対して女性は低い自己効力感を示すことが明らかにされていたが（Betz & Hackett, 1981）、Foss & Slaney（1986）の作成したビデオを視聴した学生は、視聴した職業分野に対する高い自己効力感を示した。

また安達（2002）は、日本人大学生を対象にして、進路に対する自己効力感の規定要因についての検討を行っている。安達（2002）は、Bandura（1986）が主張した自己効力感の4つの源泉のすべてを扱い、それぞれの源泉が自己効力感に及ぼす影響を検討した。その結果、「個人的達成」が自己効力感に対して有意な正の影響を及ぼすことが示され、自分自身が当該領域で何かを成し遂げることが重要であるという知見が得られている。

本研究では、進路に対する自己効力感促進において、特に「個人的達成」と「代理学習」に注目する。自己効力感の4源泉のうち「社会的支持」に関しては、周囲や他者からのサポートであるために、個人がコントロールできるものではなく、「情緒的覚醒」に関しては、Bandura（1986）によってその影響力が部分的である

と指摘されているからである。

大学生の実際の就職活動のプロセスを振り返った場合、そのプロセスの中でもっとも取り組みやすいと考えられるのが、いわゆる情報収集行動である（下村・堀, 1994）。下村・堀（1994）によると、この情報収集行動においては、たとえば仕事の内容や社風といった会社の情報や、自分のやりたいことや興味といった自分の情報が収集される。また情報源としては、たとえばインターネットなどもあるだろうし、大学に設置された就職課やキャリアセンターといった部署もあるだろう。さらに友人などから人づての情報という場合も考えられる。

昨今のインターネット情報網の発達により、様々な情報が、瞬時に入手することが可能になっている。すなわち情報収集行動においては、何らかの情報を得たいという目標に対して、その目標の達成が比較的容易であり、「個人的達成」を得られやすいとも解釈できる。また友人からの情報を得る中で、友人の成功経験を聞くこともあると想定され、その意味では「代理学習」も可能になると考えられる。

そこで本研究では、就職活動における情報収集行動が進路に対する自己効力感に及ぼす影響、そしてさらには実際の進路探索行動に及ぼす影響を検討することを目的とする。ただし、進路に対する自己効力感は、進路選択の一連の過程すべてに対して促進的に影響を及ぼすと仮定されており（Betz & Hackett, 1986）、その意味においては、情報収集行動が自己効力感を規定するという本研究の仮定は因果の方向性が逆である可能性もある。そのため、進路に対する自己効力感と情報収集行動の間の因果の方向性として、3パターンを想定し、それぞれ探索的に検討する。3パターンとは、自己効力感を原因とするもの、情報収集行動を原因とするもの、双方向の因果を仮定するものである。

方 法

調査対象者と手続き

四国地方における私立4年制女子大学の4年生109名と、私立女子短期大学の2年生128名、合計237名を対象に調査を実施した。平均年齢は、4年生大学生21.98歳（ $SD=1.15$ ）、短期大学生19.67歳（ $SD=0.52$ ）であった。調査は2005年11月上旬から中旬にかけて行われ、講義時間中もしくはゼミ毎に質問紙を配布・回収して実施した。

質問紙の構成

質問紙は、大きく3つの部分から構成された（具体的な項目例は表1参照）。

情報収集行動 まず情報収集源として、就職活動サイト、大学の就職課（キャリアセンター）、就職雑誌、身近な周囲の4種類を想定した。また収集する情報の内容としては、企業や業界に関する情報、就職活動の方法に関する情報、自分自身に関する情報の大きく3種類が想定できる（下村・木村，1994）。そこで、各種類の情報内容ごとに4項目を作成し（例：業務内容について調べた）、それらの情報内容を4種類の情報収集源を用いて調べたかどうか、“調べなかった”（1点）から“よく調べた”（4点）の4段階で回答を求めた（具体的な項目に関しては表1参照）。

進路選択に対する自己効力感 進路選択に対する自己効力感尺度（安達，2001）を参照し、進路選択、問題解決、計画立案、自己適正評価、職業情報の収集、の5領域の進路選択に対する自己効力感について、各5項目、計25項目を使用した（例：自分の能力に見合った職業を選択する）。回答は、“まったく自信がない”（1点）から“非常に自信がある”（5点）の5段階評定であった。

進路探索行動 進路探索行動として、就職活動で実際に行われる行動を11項目設定した。これらの項目に対して、“まったく行わなかった”（1点）から“非常によく行った”（5点）の5段階で回答を求めた（具体的な項目に関しては表2参照）。

結 果

回答に不備のあった者を除き、計218名からのデータを分析の対象とした。

各尺度の構造

情報収集行動 情報収集行動に関する48項目について、最尤法による探索的因子分析を行った。その結果、1因子構造が示された。そこで、因子負荷量の上位10項目を用いて1因子構造の確証的因子分析を行ったところ、GFI=.99、AGFI=.96、RMSEA=.00、CFI=1.00という値が得られ、1因子構造がデータに適合していることが示された。また1因子での α 係数は.98となった。

また、就職活動サイト、大学の就職課、就職雑誌、身近な周囲という4種類の情報収集源別の因子構造を仮定した4因子構造についても確証的因子分析を行ったところ、GFI=.93、AGFI=.88、RMSEA=.08、CFI=.98という値となり、許容できる範囲であった。各情報収集源別の α 係数に関しては、順に.96、.93、.95、.93という値であった。

また、企業や業界に関する情報、就職活動の方法に関する情報、自分自身に関する情報という3種類の情

表1 情報収集行動に関する項目

項目内容
1. 業務内容について調べた
2. 企業の採用方針について調べた
3. セミナーや会社説明会の日程について調べた
4. 先輩社員の体験談について調べた
5. 就職活動の進め方について調べた
6. 自己PRの方法について調べた
7. 面接の受け方について調べた
8. マナーや礼儀について調べた
9. 自分のやりたいことを調べる方法を調べた
10. 自分の興味・関心を調べる方法を調べた
11. 自分の適性を調べる方法を調べた
12. 自分の性格を調べる方法を調べた

- ※1 1～4は企業や業界に関する情報、5～8は就職活動の方法に関する情報、9～12は自分自身に関する情報として設定。
 ※2 これらの項目の前に「就職サイトで」、「就職進路課で」、「就職雑誌で」、「人に尋ねて」という情報源についての表現が加わったものを実際の項目として使用した。

表2 進路探索行動に関する項目

項目内容
1. 大学の就職進路課やキャリアサポートセンターに相談する
2. 大学主催のガイダンスに出席する
3. 企業にエントリーする
4. 資料請求を行う
5. 筆記試験の勉強をする
6. 合同企業説明会に参加する
7. 個別の企業説明会に参加する
8. 卒業生と会う
9. 会社訪問を行い、人事担当者とも会う
10. 1次面接を受ける
11. 最終面接を受ける

報内容別の因子構造を仮定した3因子構造についても確証的因子分析を行ったところ、GFI=.95、AGFI=.90、RMSEA=.06、CFI=.99という値になり、許容できる値であった。情報内容別の α 係数に関しては、順に.96、.95、.95という値であった。

以下の分析においては、情報収集行動全体を検討する際には全48項目の加算平均値を、情報収集源別に検討する際には4種類の収集源別の各12項目の加算平均値を、情報内容別に検討する際には3種類の内容別の各16項目の加算平均値を用いることとした。

進路選択に対する自己効力感 進路選択に対する自己効力感に関する25項目について、最尤法による探索的因子分析を行った。固有値の推移より、2因子解が妥当だと判断された。

第1因子は、因子負荷量の高い順に“新聞・雑誌・インターネットなどを利用して、職業情報を集める”、“将来の職業のために、在学中やっておくべきことの計画をたてる”、“興味ある領域の会社や組織に関する

情報を得る”といった就職活動における情報収集や計画に関する自信についての項目が多かったため、「情報収集と計画に対する自信」と命名した。また第2因子は、因子負荷量の高い順に“自分の性格にあう職業分野を明確にする”, “自分にとって理想的な職業とは何かを確立する”, “仕事をするうえでの自分の長所と短所を理解する”といった職業選択に関する自信についての項目が多かったため、「職業選択に対する自信」と命名した。

この2因子構造に関して、探索的因子分析によって得られた因子負荷量の高い順に3項目を用いて確証的因子分析を行ったところ、GFI=.95, AGFI=.86, RMSEA=.13, CFI=.91と許容できる範囲であった。しかし、各因子3項目ずつを使用した α 係数に関しては、第1因子で $\alpha=.67$ 、第2因子で $\alpha=.55$ と十分なものではなかった。そこで以下の分析においては、自己効力感に関しては潜在変数を設定した状態で使用することとした。その際に使用した測定項目は、上述の因子負荷量の高い順の各3項目であった。

進路探索行動 進路探索行動に関する11項目について、最尤法による探索的因子分析を行った。その結果、固有値の推移より1因子解が妥当であった。そこで、全11項目を用いて1因子構造の確証的因子分析を行った結果、GFI=.97, AGFI=.88, RMSEA=.08, CFI=.99となり、1因子構造がデータに適合していることが示された。1因子での α 係数は.92となり、以下の分析においては、これら11項目の加算平均の値を進路探索行動として使用することとした。

情報収集行動および自己効力感と進路探索行動の関連

就職活動における情報収集行動が進路に対する自己効力感に及ぼす影響、そしてさらには実際の進路探索行動に及ぼす影響を検討するために、共分散構造分析を行った。ただし、情報収集行動が自己効力感に影響を及ぼすのではなく、自己効力感が情報収集行動に影響を及ぼす可能性も想定できる。そこで、(1) 情報収集行動が2種類の自己効力感に影響を及ぼし、情報収集行動および自己効力感が進路探索行動に影響を及ぼすモデル、(2) 2種類の自己効力感が情報収集行動に影響を及ぼし、自己効力感および情報収集行動が進路探索行動に影響を及ぼすモデル、(3) 2種類の自己効力感と情報収集行動が双方向因果関係となり、自己効力感と情報収集行動が進路探索行動に影響を及ぼすモデル、の3パターンのモデルを設定した。

また、情報収集行動に関しても、(a) すべての情報収集行動をまとめて扱う場合に加え、(b) 情報収集源によって分割する場合、(c) 情報内容によって分割する場合、の3通りが想定できる。そこで、情報収集

行動の取り扱いに関しても、これらの3通りすべてを検討した。したがって、情報収集行動および自己効力感と進路探索行動の関連を検討するにあたっては、合計9つのモデルを作成し、それぞれのモデルに対して最尤法による共分散構造分析を行った。

分析の結果、自己効力感と情報収集行動が双方向因果関係となるモデルに関しては、情報収集行動の取り扱いにかかわらず、モデルが識別されなかった。それ以外のモデルに関しては、RMSEAの値からはモデルの適合が十分でないことが示されたが、その他の適合度指標の値からは概ねデータとモデルとの適合が許容範囲であることが示された。識別されたモデルの適合度指標を表3に示した。識別されたモデルの分析結果を図1～6に示した(値はいずれも標準化係数。有意なパスのみを表示。* $p < .05$, ** $p < .01$)。

考 察

本研究の目的は、就職活動における情報収集行動と進路に対する自己効力感との関係を検討し、それらが進路探索行動に及ぼす影響過程を明らかにすることであった。この目的に沿い、(1) 情報収集行動が原因となり、自己効力感と進路探索行動に影響を与えるモデル、(2) 自己効力感が原因となり、情報収集行動と進路探索行動に影響を与えるモデル、(3) 情報収集行動と自己効力感に双方向の因果関係が存在し、それらが進路探索行動に影響を与えるモデル、という3つを構成し、共分散構造分析による分析を行った。分析の段階において(3)のモデルは識別されなかったため、以下では、(1)と(2)のモデルから得られた結果を順に考察し、最後に今後の課題について述べる。

情報収集行動が自己効力感および進路探索行動に及ぼす影響

まずは(1)のモデル、すなわち情報探索行動が自己効力感に影響を及ぼし、これらが進路探索行動に影響を与えると仮定したモデルについての結果を考察していく。

表3 各モデルの適合度指標

モデル	GFI	AGFI	RMSEA	CFI	AIC
情報収集行動を総合したモデル					
パターン1	.94	.86	.11	.93	101.49
パターン2	.93	.86	.12	.93	105.33
情報収集源によって分割したモデル					
パターン1	.93	.84	.10	.96	167.11
パターン2	.93	.84	.10	.96	169.90
情報内容によって分割したモデル					
パターン1	.92	.83	.12	.95	160.07
パターン2	.93	.84	.12	.95	157.24

注：パターン1は、情報収集→自己効力感の因果の方向性を仮定し、パターン2では自己効力感→情報収集行動の因果の方向性を仮定した。

図1をみると、情報収集行動は、自己効力感尺度の下位尺度である「情報収集と計画に対する自信」と「職業選択に対する自信」の両者に対して、さらに進路探索行動に対して有意な正の影響を及ぼしていた。つまり、就職活動において必要となる種々の情報を入手することによって、自分が進路選択に至るまでの計画を効率的に行えるという自信や、自分に合った進路や職業を的確に選択できるという自信を高め、実際の進路決定に向けての行動をも促進すると考えられる。

しかし、情報収集行動を、その情報収集源によって4つに分類して分析を行った図2を見ると、このような影響過程は、特定の情報収集源にのみ存在することがわかる。まず、情報収集行動から自己効力感への影響に着目すると、自己効力感を高めているのは「就職サイトでの情報収集」のみであった。また注目すべきは「他者からの情報収集」が「情報と計画についての自信」に対して有意な負の影響を示したことである。下村・堀(2004)は、大学生が就職活動において、友人とどのような情報交換をしているのかを自由記述で収集した結果、“それぞれの進行状況”や“現在の就職活動の状況”といったお互いの就職活動の進行状況についての話題が上位を占めることを明らかにしている。このような情報収集は、自分の就職活動の進行度合いに関して焦りや不安を生じさせ、その結果として自己効力感を低下させる恐れがあると考えられる。

次に、進路探索行動への影響に着目すると、まず、「就職サイトでの情報収集」が有意な正の影響を及ぼしていた。下村・堀(2004)は、就職活動においてインターネットの就職サイトを利用した者のほうが、しなかった者と比較して、企業の資料請求を行う、企業主催のセミナーに参加する、エントリーシートを送付するなどの行動を多くとることを明らかにしている。この知見と本研究の結果を併せて考えると、就職サイトでの情報収集は、進路探索行動を促進するために有効であると言える。

また、「就職進路課での情報収集」と「他者からの情報収集」もそれぞれ有意な影響を与えていた。下村・堀(2004)は、OB/OGによる情報収集は、実際の職場で働いている人の印象や雰囲気といった生の貴重な情報が入手され易く、このような情報によって企業社会に対するイメージが明確になるほど、就職活動のモチベーションも高まると述べている。本研究における「他者からの情報収集」の中にはOB/OGからの情報収集が含まれている可能性があり、そのために進路探索行動が促進されたとも考えられる。また、就職進路課で経験が豊富な職員から情報を収集することは、上述のOB/OGからの情報収集と同様に、企業

社会に対するイメージを明確化させ、進路探索行動を促進したと推測される。

さらに、情報収集行動を収集される情報内容によって3つに分類して分析を行った図3をみると、「就職活動の方法に関する情報内容」と「自分自身に関する情報内容」は「情報収集と計画に対する自信」に正の有意な影響を及ぼしていた。就職活動における指針、マナー、礼儀についての情報や、自分自身の興味や適性についての情報を得ることによって、進路選択に至るまでの計画を立てられるという自信が高まっていくと考えられる。しかしながら、「就職活動の方法に関する情報内容」は「職業選択に対する自信」に有意な負の影響をも及ぼしていた。この点に関する解釈は難解であるが、就職活動における指針、マナー、礼儀についての情報を入手していくことで、その困難さを自覚することにつながり、そのことが自分に合った進路や職業を的確に選択できるという自信を低下させるとも推測される。

次に進路探索行動への影響に着目すると、「企業に関する情報収集」のみが有意な正の影響を及ぼすことが示された。先に述べたように、企業社会についての情報が明確化するほど、就職活動へのモチベーションが高まると指摘されている(下村・堀, 2004)。そのため、企業に関する情報収集をすることで、進路探索行動が促進されたと考えられる。

なお、自己効力感は就職活動に対して促進的に影響を及ぼすという先行研究(浦上, 1996)を受けて、本研究では自己効力感から進路探索行動へのパスをモデルに組み込んだ上で分析を行ったが、有意な影響は示されなかった。ただし、浦上(1996)が結果変数として使用した就職活動の項目をみると“自分の職業選択に必要な情報を得るために、新聞・テレビなどのマスメディアを利用すること”や“学校の就職係や職業安定所を探し、利用すること”などの本研究における情報収集行動に当たる項目と、“就職時の面接でうまく対応すること”といった本研究における進路探索行動に当たる項目が分けられずに混在していた。この点から本研究の結果を解釈するならば、浦上(1996)による就職活動を情報収集と進路探索行動に分離した場合、自己効力感は、情報収集行動には促進的な影響を及ぼすが、進路探索行動には影響を及ぼさないといった可能性が考えられる。

自己効力感が情報収集行動および進路探索行動に及ぼす影響

続いて(2)のモデル、すなわち自己効力感が情報探索行動に影響を及ぼし、これらが進路探索行動に影響を与えると仮定したモデルについての結果を考察し

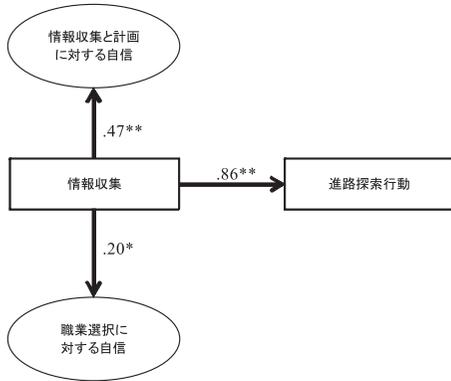


図1 情報収集行動を総合したモデルの結果 (パターン1)

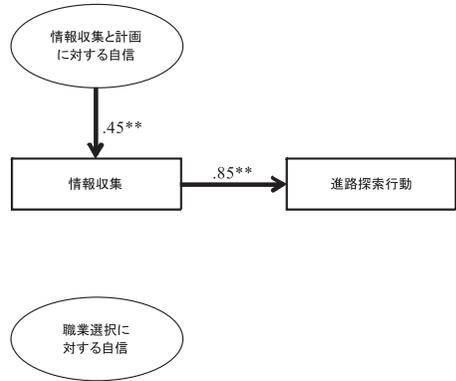


図4 情報収集行動を総合したモデルの結果 (パターン2)

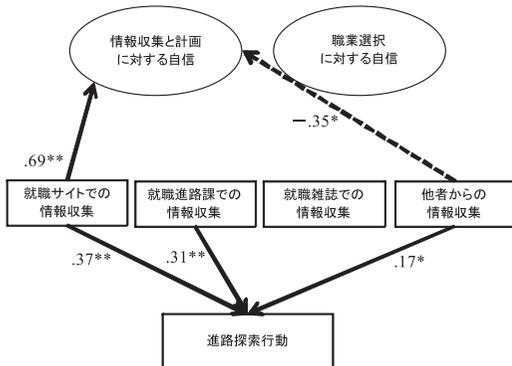


図2 情報収集源を分割したモデルの結果 (パターン1)

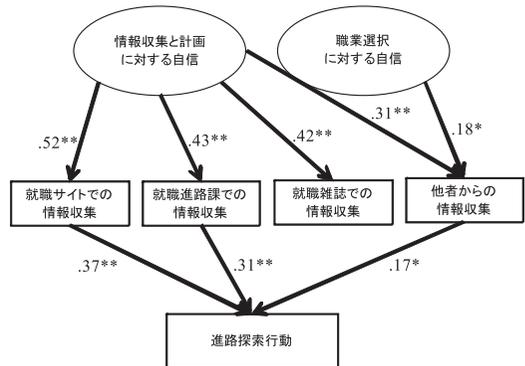


図5 情報収集源を分割したモデルの結果 (パターン2)

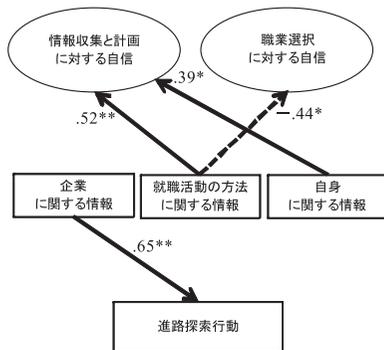


図3 情報内容を分割したモデルの結果 (パターン1)

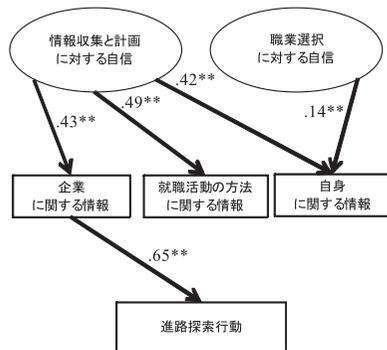


図6 情報内容を分割したモデルの結果 (パターン2)

ていく。

図4をみると、自己効力感尺度の下位尺度である「情報収集と計画に対する自信」は情報収集行動に対して、また情報収集行動は進路探索行動に対して、それぞれ有意な正の影響を及ぼしていた。自分が進路選択に至

るまでの計画を効率的に行えるという自信によって、就職活動において必要となる種々の情報を入手する行動が促進されると考えられる。この結果により、本研究で当初に想定したように、自己効力感から情報収集行動への逆方向の影響関係も存在していることが確認

されたと言える。

また、情報収集行動を情報収集源によって4つに分類して分析を行った図5をみると、「情報収集と計画に対する自信」はすべての情報収集源による情報収集行動に対して有意な正の影響を及ぼしていた。あらゆる情報収集源を利用して情報収集行動ができること背景には、自分が進路選択に至るまでの計画を効率的に行えるという自信が必要であると考えられる。また、「職業選択に対する自信」は「他者からの情報収集」にのみ有意な正の影響を及ぼしていた。自分が進路選択に至るまでの計画を効率的に行えるという自信は、友人や先輩から就職活動に関する情報を入手するための行動を引き起こすと考えられる。

情報収集行動を収集される情報内容によって3つに分類して分析を行った図6をみると、「情報収集と計画に対する自信」はすべての内容の情報収集行動に対して、「職業選択に対する自信」は「自分自身に関する情報内容」のみに対して有意な正の影響を及ぼしていた。これは、自分が進路選択に至るまでの計画を効率的に行えるという自信は、内容を問わず情報収集を引き起こすことを示している。また、自分に合った進路や職業を的確に選択できるという自信を持つことによって、自分の興味や適性を知り、自己理解を深めようとすることに繋がっていくと考えられる。

なお、安達(2001)は、本研究における情報収集行動とはほぼ同様の概念を、探索行動と命名して、自己効力感との関連を検討している。その結果、自己効力感から探索行動に有意な正の影響が示されており、これは本研究の結果と一致している。本研究で得られた結果をみると、「情報収集と計画に対する自信」は「職業選択に対する自信」と比較して、多くの情報源や情報内容に影響を及ぼしていた。安達(2001)は自己効力感尺度を1因子構造として使用していたためこのような相違は検討できなかったが、本研究によって自己効力感を2側面に分けて検討することで、情報収集行動への影響過程が詳細に検討されたと言える。

今後の課題

前述のとおり、本研究では、(1) 情報収集行動が原因となり、自己効力感と進路探索行動に影響を与えるモデル、(2) 自己効力感が原因となり、情報収集行動と進路探索行動に影響を与えるモデル、(3) 情報収集行動と自己効力感に双方向の因果関係が存在し、それらが進路探索行動に影響を与えるモデル、という3つを構成し、共分散構造分析による分析を行った。その結果、情報収集行動と自己効力感に双方向の因果関係を仮定した(3)のモデルは識別されなかった。この原因としては、調査対象者の人数が少ないといった標

本上の問題や、情報収集行動と自己効力感という二つの構成概念に双方向の因果関係を仮定することが困難であるといったモデル構成上の問題が存在した可能性が考えられる。しかしながら、(1) および (2) のモデルにおける適合度は許容範囲にあることから、(3) のモデルを構成することに理論上での問題は無いと考えられる。今後の研究では、(3) のモデルが識別されなかった原因を究明し、両概念の双方向からの因果関係を同時に検討していくことで、より精度の高いモデルを構成していく必要があるだろう。

また、先行研究では進路に対する自己効力感は種々の就職活動に促進的に影響を及ぼすと指摘されてきたが(Betz & Hackett, 1986)、本研究では情報収集行動には影響を及ぼさず、進路探索行動には影響を及ぼさない可能性が示された。安達(2001)によれば、活動に対する自己効力感が高く、良い結果が得られると判断するとき、人は活動の具現化に向けて目標を設定する。この点から解釈するならば、自己効力感のみが高くても学生は実際に目標を設定して進路探索行動を起こすということではなく、自己効力感に加えて、自身の活動に対して良い結果が得られると認知することによって、初めて進路探索行動を起こすという可能性が考えられる。この点に関しては今後のさらなる検討を要する。

大学生にとっての就職活動とは自分自身の生き方を決定する重要なものであるだろう。しかしそれは、時として非常に大きな困難を伴う。本研究によって、就職活動の一部である進路探索行動は、情報収集というもっとも取り組みやすい行動によって強く促進されることが明らかにされた。このことから、情報収集行動を就職活動一連の流れの中の冒頭に位置付けることが、学生自身にとって有益かつ負担の少ない就職活動を実施できるようにするかもしれない。今後の研究では、本研究で得られた知見を応用し、大学生を積極的に就職活動に向かわせ、学生自身にとってよりよい就職活動を実施できるようにするための効果的な介入方法の開発を検討していくべきであろう。

【謝辞】

本研究のデータは、松山東雲女子大学の2005年度卒業生樋笠萌子さんより提供を受けた。記して感謝する。

【引用文献】

安達智子(2001). 大学生の進路発達過程 — 社会・認知的進路理論からの検討 教育心理学研究, 49,

- 326-336.
- 安達智子 (2002). 進路に対する自己効力感の規定要因: Bandura (1986) による4つの情報源の比較. 日本教育心理学会総会発表論文集, *44*, 138.
- Bandura, A. (1986). *Social foundations of thought and action: A social cognitive theory*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Betz, N. E., & Hackett, G. (1981). The relationship to career-related self-efficacy expectations to perceived career option in college women and men. *Journal of Counseling Psychology*, *28*, 399-410.
- Betz, N. E., & Hackett, G. (1986). Applications of self-efficacy theory to understanding career choice behavior. *Journal of Social and Clinical Psychology*, *4*, 279-289.
- Foss, C. J., & Slaney, R. B. (1986). Increasing nontraditional career choices in women: Relation of attitudes toward women and responses to a career intervention. *Journal of Vocational Behavior*, *28*, 191-202.
- Lent, R. W., Brown, S. D., & Hackett, G. (1994). Toward a unifying social cognitive theory of career and academic interest, choice, and performance. *Journal of Vocational Behavior*, *45*, 79-122.
- 中島由佳・無藤 隆 (2007). 女子学生における目標達成プロセスとしての就職活動: コントロール方略を媒介としたキャリア志向と就職達成の関係. 教育心理学研究, *55*, 403-413.
- リクルート (2008). こんな時どうする? 就職活動 Q&A. <<http://rikunabi2009.yahoo.co.jp/CNT/QA/start/q02.html>> (2008年9月30日)
- 下村英雄・堀 洋道 (1994). 大学生の職業選択における情報収集行動の検討. 筑波大学心理学研究, *16*, 209-220.
- 下村英雄・堀 洋元 (2004). 大学生の就職活動における情報探索行動: 情報源の影響に関する検討. 社会心理学研究, *20*, 93-105.
- 下村英雄・木村 周 (1994). 大学生の就職活動における就職関連情報と職業未決定. 進路指導研究, *15*, 11-19.
- 浦上正則 (1996). 女子短大生の職業選択過程についての研究 — 進路選択に対する自己効力, 就職活動, 自己概念の関連から —. 教育心理学研究, *44*, 195-203.